

第一次国共合作期におけるコミンテルン 軍事顧問の役割 (17)

—— A.И. Черепанов : Записки Военного Советника
в Китае —— を中心として

滝 本 可 紀

On the Role of Military Advisers of Comintern in the Period of the First
Kuomintang and Chinese Communist Party Cooperation (17)

Yoshinori TAKIMOTO

Abstract

The peasant movement in China in 1926 and particularly in 1927, assumed tremendous scope and had a strong impact on the course of the revolution. The importance of the Wuhan provisional Government lies in the fact that it created favourable conditions for large-scale organisation and involvement of the masses as the decisive factor in political struggle.

From the very outset, the imperialists boycotted Wuhan economically. British companies refused to accept the national government's bank-notes. However, on the night of 3 January, rickshaws, coolies, and students broke through a line of soldiers, burst into the concession with Guomindang flags, staged a demonstration there, and smashed a police station. Chinese citizens finally felt that they were the masters of their own city.

1926年7月に始まった国民革命軍による北伐は、あらゆる予想を上まわる快進撃を続け、またたく間に長江流域にまで進出した。国民党と中国共産党の統一戦線がそれに多大な貢献をしたことは疑い得ない。北伐を背景に各地に農民組合や労働組合が結成され、その行動は極めて活発となった。この事は国民革命軍の将校達の出身基盤が主として地主層であることと矛盾し、また各地の企業家達との関係も悪化させた。国民革命軍の長江進出によりこの地域に大きな権益を有する列強、特に英国との関係は尖鋭化した。1927年4月12日、蔣介石は上海クーデターを起こし、第一次国共合作は崩壊した。中国はいつ果てるとも知れぬ内戦に突入した。

以下は当時の国民革命軍軍事顧問 A.И.Черепанов の回想録《Записки Военного Советника в Китае》1976 НАУКА の546頁～570頁の全訳である。

そのような圧制は必然的に、最も緊迫した形の反撃を引き起こすことになった。1926年12月、農民組合は湖南省を掌握しつつあった。農民組合の中で最も強力なものは平江、湘潭、萍郷地区につくられた。農民達はいくつかの民団を武装解除し、食糧の値上げを禁じ、地代を切り下げ、圧制的な地主達に三角帽をかぶせて連れまわしながら、時には彼らを殺すこともあった。こ

の時、貴州軍閥軍が駐留していた湖南省西部はこの災難に見舞われなかった。

原始的で悲惨な農村生活は一風変わった形態の闘争を引き起こした。例えば《饗宴》。棒と槍で武装した、約400人の農民が金持ちの地主の屋敷に現われ、3～4日滞在した。地主はこの間ずっと、招かれざる客に十分に食事を出し、その上、愛想のよい微笑を顔に浮かべねばならなかった。間もなく湖南省の地主達が一斉に、長沙や武漢といった省都、ある場合には上海にさえも逃げて行ったのは当然であった。

1926年12月、湖南省政府の財政担当者は武漢の当局者に、湖南省はあなた方に収入の一部をまわすことができないどころか、湖南自身が援助を必要としている、と愚痴を言った。彼は事情を次のように説明した：《頻発した過激な行為が全ての富裕な人々を追いつつた。彼らは農民を恐れ、どんどん自分の土地を捨てて去って行った》。

ボロジンは当時の中国に於ける大衆運動の全般的な歴史的意義について、次のような判断を下した：《湖南省の農民組合には120万人の農民が加入し、湖北省では30万人、広西省では20万人、それに対し、武漢地区では350の労働組合が生まれ、全体で34万人の組合員であった（これは運動が極端に細分化されているこ

と、及び運動の後進性をよく表わしている一筆者)。この流れは中山艦事件によって作られた人工のダムを容易に決壊しつつある。広州及び武漢に於ける労働者のストライキの波や広東及び湖南省の活発な農民闘争は《中山艦事件》の結果つくられた政策を、下から事実上一掃した》。

農民闘争は村の搾取者と結びついている、国民革命軍の大多数の将校達の利己的な利害をひどく侵害した。1926年12月すでに、地方軍が農民組合を攻撃する事件がいくつか起こった。我々の同志達がそうした事件の一つを記録している：萍郷で、暴動鎮圧隊が、民団を武装解除するために農民組合を組織した革命家羅を逮捕した。彼を《もし貴方が正しいならば何も恐れることはない》と説得し、話し合うためと称して村から連れ去った。そして、すぐに銃殺した。ますます事態はむずかしくなった。1927年4月か5月頃、ボロジンは述べた：《客観的に見ると、軍は活発に行動する反革命者になり始めた》。彼は雑誌《広東》の8,9号に掲載した論文の中で、中国西南部にも言及した：《国民革命軍の全部隊は農民運動に敵対的である》。

1927年1月、湖南省の農民運動に危機的な状況が起こった：地主達は防衛体制を固めていき、一方農民組合は各地で行政機関を握った。毎月毎月闘争の緊迫度が増大し、農民の要求は個人的なものから一般的なものに変わっていった。ソ連共産党は中国の解放闘争を注意深く見守り、その進展の段階毎に時機を得て、本質的な判断を下した。1927年5月13日、全ソ連邦共産党中央執行委員会は、自分達の見解からすると《状況が湖南省に似た省においては土地没収のスローガンは実に時機にかなったものである》と述べた。

武漢の《臨時政府》

革命の発展段階での武漢の意義はまさに、それが政治闘争の決定的な要素となる大衆の組織化を行なったこと、大衆が政治闘争に参加するに好都合な状況をつくり出したことにあった。武漢政府自体《国民党を軍事的独裁から救おう》というスローガンを持つ小資本家、市民大衆を代表していた。ボロジンの見解によると、武漢の指導者達によって自分の利益が守られた人々は：《ルンペン・ブルジョアジー》(生き生きとした、しかもとても適切と私には思われる用語—筆者)、落ちぶれたインテリ、そして1925年の5・30事件の過程で生まれた学生、商人、教員等の色々な団体であった。

彼らを《古いがらくたの一掃》に駆りたてたのはとりわけ、軍閥の横暴と匪賊に対する嫌悪、商売をやる上で交通の便や他の条件が欠けていること、そして金融の壊滅的状况であった。彼らは権力の民主化を求め、

将軍達の立身出世主義と誠実に闘った。3月の中央執行委員会全体会議の時、蒋介石が見事なまでに孤立していたのは偶然ではなかった。しかし、小ブルジョアジーの考え方に関するレーニンの分析をよく知っている人は誰でも、武漢政府の政策を決定していた人々の中に、《左派》政府の社会的行為の特徴ともいべき大いなる動揺性を見てとることができた。ボロジンは次のように述べた：《左派と我々との連帯の全歴史を通して、左派の人々が大衆運動の成長や中国共産党に不安を感じなかった時は一時もなかった。彼らは中国共産党と大衆を利用し、それから成り行きを見ようとした》。だが、そのような当てにならない同盟者でさえも利用せざるを得なかった。結局ここでは、中国共産党の力量と、柔軟性を発揮して発展しつつある革命から得られる教訓を急いで総括する能力にすべてがかかっていた。

《左派》は大衆を頼りにすることとソ連との同盟が不可分であることを知っていた。蒋介石の反革命的な独裁行為があった後、左派はボロジンに使節団を送り、《いかなる個人的行為もあなたを困らせることはできない。というのは、あなたは第二大会で高い地位に任命されているのだから》と説いた。だが一方《左派》は陰謀家達を容赦なく一掃することはできなかった。ボロジンの言葉によると《分裂からいわゆる武漢時代の終りまでの全期間、武漢政府側の人々は蒋介石に対して決定的な闘いをしなかったし、またその準備をする気持もなく、ただ準備のことを口にするだけであった。作戦の主導権、時期の選択、攻撃の場所は蒋介石の手中にあった》。《左派》がとり得た最大の毅然とした態度は国民革命軍が南京と上海を占拠した直後に見られた。陳友仁、宋子文、交通大臣孫科を含む使節団がそこに送られた。彼らは国民革命軍の将軍達への特別の指令と蒋介石個人への指令を持って行った。その内容は：労働者のピケ隊は国民革命の秩序維持のための部隊として認められ、それを強化するために3万ドルが割り当てられた、というものであった。また蒋介石に対しては、捕獲した武器を渡すこと、各地の金融機関を独占しないこと、外交関係に自分の代表を任命しないこと、という指令であった。しかし、使節団の行為は実質的な力に欠けており、そのため、こうしたことは全て単なる形式的な行為にすぎないものであった。

武漢政府は大衆を全面的に当てにすることを願わなかった以上、再び軍閥間の対立を利用せざるを得なかった。軍閥達は全権力を蒋介石の手に集中させなかった。この点に関して、基幹兵団の一つの司令官朱培徳将軍が1927年4月5日、中国共産党及び国民党員にあてたメッセージは興味深いものであった。彼は更なる団結の必要性を長々と述べ、中国共産党は《国民党と孫文の三民主義が革命運動の基本であることを

心から、公然と認めていた」と力説した。同時に、朱培徳將軍は《中国に於いては、プロレタリアートによる支配はまだ当分の間確立されないであろう》、中国は《抑圧された民族》なので、プロレタリアートの支配を全く必要としないと言った。労働者達が自己の政府を組織しようとしている、また上海の外国租界に対する攻撃が企てられているという噂を、彼は《低級なデマ》であるとした。

《左派の連中》は主として、紙面を利用して蒋介石に反対した。例えば、徐謙(独裁とは何か)と孫科は軍事独裁に反対する論文を発表した。少なくとも、武漢側が蒋介石に決定的な打撃を与えられる瞬間があった。つまり、南京が第2、第6軍の手中にあり、その首脳部が武漢側に同情的であった時である。迅速な行動をとり、また矛盾した指令や司令部の動揺がなかったら、南京は国民政府の手中にあったであろう。武漢の支持者は増援部隊が来るまで、そこでもちこたえることができたであろう。1927年4月7-9日、武漢政府は南京に首都を移転する決議を採択しようとし、第4、第11軍の部隊を南京派遣のために、汽船やジャンクに乗船させることさえした。だがその後、北方の河南省へ進撃するという考えが勝利し、兵士達を下船させた。機を逸した。矛盾した行動と徐々に右傾化していくことが武漢政府側の政治の本質であった。政府は工場閉鎖に対して、プロレタリアートを守るためのいかなる手段もとらなかった。顧孟餘と徐謙は労働組合の行動を制限したり、その再編成を要求した。というのは、顧孟餘の見方からすると、組合は《あまりに過激》であった。1927年5月18日、国民党中央執行委員会は労働運動を制限する指令を出した。その要点：労働争議の解決のために仲裁裁判所を早急に創設すること、労働法を導入すること、労働者や事務職員が過度な要求を出したり、企業経営に介入したり、経営者を威すのを禁止する指令を出すこと。《左派》のリーダー達だけでなく譚延闓や程潜もまた、農村におけるいわゆる《過激行為》に反対であると主張し、農民組合の再編を主張した。

1927年4月、悪名高い国民党《農業委員会》が会議を行なった。汪精衛と唐生智は極めて革命的にみえる演説を行なった。唐生智は自分の土地を没収するようにとさえ訴えた。同時に、彼は国民革命軍の将校達が所有する土地は没収しないように要求した。しかしながら、ポロジンの意見によると、結局、委員会は何も有意義なものは生み出さなかった。委員会の出した案は国民党中央執行委員会政治局によって二度討議され、その結果、次のような決議が採択された：《農業法に関する問題を撤回すること》(鄧演達以外全員《賛成》)。《左派》は社会問題を幅広く討議することさえも妨害した。《Chinese Information Bulletin》は経済の

現況を解明し、中国共産党第5大会での汪精衛の演説と、この大会の農業に関する決議内容を書いたが、顧孟餘の命令により第7号で発行禁止となり、押収された。このように《左派》は砂の中に頭を隠して、革命の発展の中で最も先鋭的な問題のいかなる解決をも避けようとした。武漢側の一貫性の無さは彼らの外交政策にも見られた。

狼のような歯をむき出した帝国主義者

帝国主義者達は最初から、経済的に武漢をボイコットしていた。英国の会社は武漢政府発行の銀行券を受け取らなかった(受け取るのは少額を低いレートで)、そして武漢政府と結びついてない外国銀行の銀行券か、あるいは銀を要求した。政府は外国の企業家と交渉して事態を解決しようと望んだが、交渉の前提条件として、銀の輸出入禁止を解くという断固たる要求にぶつかった。

武漢政府側は帝国主義国家間の対立を利用しようとした。彼らは陳友仁を通じて日本の資本家に、企業の状況を改善し、貿易業務を再開するように求めた。これに答えて、漢口の日本人《実業界》は言明した：《我々は昔からの得意客を見つけ出すことができない》。そのはずであった、というのは、彼らの頭にあったのは買弁であった。

1926年12月、武漢政府はある会議で広く宣伝を展開し、もし必要なら英国帝国主義を排撃するという、牯嶺に於ける会議の決議を再確認した。同時に、交渉のために使節団を東京へ送ることを決定した。この考えは実行されなかったが、蒋介石は1927年3月に単独で、戴季陶を個人的な代理人として日本へ派遣した。

漢口と九江の英国租界が奪取された際に、政府がとった態度は政府の方針を非常によく表わしている。国民革命が勝利したことで、1月2日と3日、漢口に於いて大規模な政治集会が開かれた。3日17時、大衆は英国の監視所近くの税関に集まった。この時、英国人水兵の一人が二人の中国人に致命傷を負わせた。それに対して、群集は租界に石を浴びせかけ始めた。政治集会によって送られた代表者は政府の会議に文字通り突入し、必要な措置が講じられるまでは解散しない、と宣言した。

政府側は何人かの代表を送り、家に帰るように呼びかけた。そして、《中国側に有利になるよう事件を解決する》手段を講ずる、と約束した。政府は陳友仁に次のことを要求するように言った。英国人水兵を辞めさせ、中国軍当局が租界の警備を引き受ける、さもなければ、租界の安全を保証することができない。だが、1月3日から4日にかけての夜中、人力車夫、苦力、学生達が軍の警備線を突破し、国民党の旗をもって租界

になだれこみ、そこでデモを行ない、警察署を破壊した。

中国人民は自分が自分の生まれた町の主人であることを感じた。彼らは外国人の行動を注意深く見張り、確認のために彼らを拘留した。我々ソ連の顧問達は自分の目の前で、パトロール隊によって制止させられた二人の《紳士達》がびっくり仰天したのを思い出す。その一人が細い声で《喫飯》《喫飯》と繰り返しながら、自分達は食事に行くところだ、と同情を引くような調子で中国人に説明した。なにしろ、この人達はついさっき、車夫に金を払おうとして道路に金を投げつけたのであった。

ソ連の顧問達は指摘した：《当時、ロシア人に対する態度は他と異なっていた。自分がロシア人だ、と熱狂した群衆に告げるだけで十分であった。そうすれば、通過することができ、身を護るために警備員をつけてもらうこともできた。その際、《赤いロシア人—紅党人》であることを必ずつけ加えねばならなかった》。

一方、ブリュヘルは1月8日、南昌での軍事会議が閉会した直後、そこから次のように知らせた：《国民党中央執行委員会政治局は帝国主義国との衝突を避け、外交手段によって事件を解決することを決議した》。

しかし、帝国主義はすぐに牙をむきだした：程潜の第6軍が南京を占拠している時、帝国主義国の軍艦がそこを猛烈に砲撃した。山東軍閥は傭兵であるマカレンコ少将率いるロシア白衛軍の旅団を自分の軍の先頭に置いて、国民革命軍に向かわせた。しかし、程潜の顧問 Александр Черников は白衛軍に対する作戦として、第17広州師団を特に前以って準備していた。3月24日、遭遇戦において、国民革命軍は、手に酒を持ち酔っぱらって攻撃してきた白衛兵を撃破した。そして南京からすっかり彼らを追い払った。国民革命軍は帝国主義列強の砲艦から砲撃を受けたが、それに反撃した。だが、代表を交換して事件の解決をみた。

その後間もなく、南京で所属不明の軍人達が外国人や領事館を攻撃し、山東軍閥所属の、ある大隊付きの顧問である英国人の砲兵将校が殺され、副領事が負傷した。これは恐らく、国民革命軍の服装をした、山東軍閥兵士の挑発だったのであろう（ボロジンの見解）。また、1927年1月7日、九江の租界を占拠した際にそこで略奪を行なった、賀耀組の以前の兵隊が犯人だったのかもしれない。ともかく、イギリスやアメリカの砲艦が平和な住民に向けた一斉射撃でそれに応じ、数軒の家の屋根が壊され、数人が負傷した。英国人は司令部に最後通牒を発し、謝罪と人質として師団長を砲艦に送りこむことを要求した。日本の海軍将校達が自国の司令部に問い合わせると、司令部は次の指令を出した：《日本はこの件に関して介入しない》。その間、ア

メリカ、イギリス、日本、イタリアの政府全権委員による会議が開かれ、即時介入の妥当性について討議された。イタリアは港の武力による占拠と、漢口の岸壁の管理を列強間で分けもつことに賛成した。アメリカと日本は革命が先ずイギリスの利害に打撃を与えることを考慮に入れ、それに反対した。その結果、南京事件に関連して共同の覚書きが作成されただけであった。外務大臣の陳友仁はこの際必要とされる強硬な態度を示し、覚書きを受け取るのを拒絶した。フランスの外務省が1927年4月28日、次のように報告した：《中国がアジアに於ける Kommunismus の発生地になることを恐れて、列強の間で事実上の同意が得られた。そして、全列強はこの脅威を減ずるための手段をとることを決定した》。

英国人は帝国主義陣営の中に意見の不一致があるのを見て、より柔軟に行動し始めた。同じ報告書の中で彼らの戦術の核心が次のように述べられていた：先ず、金銭的手段を含めた、様々な手段で民族運動を行っている人々を英国側に引き寄せること。これは民族運動に従事している人々を墮落させる、実験済みの方法であった。日本人はそれとは反対に、横柄且つ粗野に振舞った。1927年4月3日漢口で、酔っぱらった日本人水兵が車夫に取り決めた金を支払うことを拒否した。しかも、彼の抗議に対して、銃剣で腹を刺した。すぐに大勢の車夫や苦力が集まって来た。日本側は陸戦隊を上陸させ、バリケードを築き、群衆に向けて機関銃を撃った。国民革命軍の部隊が到着し、帝国主義列強と憤激した大衆との間に陣地を築いた。日本租界は有刺鉄線で囲まれ、日本人は3隻の駆逐艦と1隻の巡洋艦に護られて、急拠、武漢から避難し始めた。

このように、全帝国主義列強は硬軟両用の手段をとりながら、一つの共通の目的—革命を押しつぶすことを狙っていた。このことは、蒋介石が反革命クーデターを行なった後、列強が彼に支持を示したことによく表われている。

蒋介石は権力を掌握する

4月12日の直後、蒋介石は非常に不安を感じていた。彼自身の陣営の中にも反目があった。我々顧問達は蒋介石の行為について、特に Панюков から知った。彼はすでに述べたように、上海にやって来た部隊と以前から行動を共にしていた。今や、Панюков は極めて危険な立場にあり、事実上は自由を奪われ、状況を観察する機会を利用することだけが可能であった。Коми は4月の終りには南京の街路に姿を見せることができなくなった、と知らせた。白崇禧の兵隊達は脅迫と叫び声で彼に嫌がらせをした：《赤い軍閥》《赤いごろつき》

一方、蒋介石は例の如く、跡をくらし、安っぽい芝居で自分の行為を隠そうとした。5月、彼は Панюков に次のように主張し始めた：《私はボロジンだけに反対している、というのは、彼の権力は限度を越えている》、《ボロジンは篡奪者だ》、《私は面子を失った》等々。蒋介石はヒステリックに拳で自分の胸をたたいた。蒋介石と何応欽はブリュヘルに、すぐに南京に来て、調停者として《争っている兄弟を和解させ》て欲しい、という電報を何通も打った。白崇禧をリーダーとして、4月12日から20日まで行なわれた激しい反ソキャンペーンは一時的に中止されたが、5月1日、外国人租界を除く上海の全地域に、ソ連と中国共産党を対立させようとするポスターが貼られた。勿論、蒋介石が支払ったこの《前金》はすべて無駄になった。我々同志達は革命の裏切者に対して、原則的且つ断固たる立場をとった。そして、いかなる形にせよ、彼との関係を保つことなど全く問題にならなかった。

Панюков の観察によると、蒋介石のグループには統一がなかった。4月12日に死刑執行人の役割を果たした、親日派で極端な右派である白崇禧は個人的野心をいっていた。彼のバックには第7、第10、第17、第15軍があった。彼は孫伝芳との交渉を始め、張作霖が召集していた軍閥会議に参加することに賛成する意見を激しい勢いで述べた。孫伝芳との交渉は4月の終わりまでうまくいっていた。上海の将校会議で白崇禧は発言した：《孫伝芳が我々に反対しているのは、彼が我々を赤であるとみなしたからである。今や、彼は我々が全く赤でないことがわかり、赤の一味に対する最終的な、共同の闘いのために我々と手を結ぶことを本気で決めた》。

しかし、蒋介石は白崇禧を警戒し、処置を講じた。白崇禧が上海の、実入りのあるポストに就かせていた彼の子分達は蒋介石一派に取り替えられた。彼らはブルジョアジーの中で、まっ先に不安から騒ぎだてた、全く無名の上海のブルジョアジーであった。だが、最初の月、ブルジョアジーは陰謀家の一味を、金で強力に援助することができなかった。なぜならば、山東軍閥と孫伝芳は逃げる際、ずっと先までの税金をかき集めていたからである。蒋介石一派には山東軍閥の砲撃から、南京を守ることさえできないということがブルジョアジーの不満を生んだ。

しかし、蒋介石の立場は徐々に安定していった。武漢は封鎖状態に陥った。四川省では劉湘將軍が左翼や労働者の組織を破壊し始めた。蒋介石は武漢側の見込み違いを利用した：第2軍は山東軍閥との戦いの泥沼にはまり込んでいた。一方、第6軍は色々な戦区に分散していた。これらの部隊に撤退命令が出された時、第2軍はその半数が戻って来たが、第6軍は完全に戦闘能力を失っていた。武漢側の東方における唯一の足場

が斯くも無様に失われた。

蒋介石は最終的に上海から資金を手に入れると、ただちにそれを利用した。彼は武漢政府が支配している地域で広汎な破壊工作を組織し、軍閥の武装蜂起を次々と行なわせた。漢口の日本租界に、反革命活動の準備のための本部がつくられた。

反乱の続発

武漢政府が河南省で広汎な軍事行動を始めた時、首都防衛のために湖北省に残されていたのは少数の部隊であった：第15軍と唐生智の第8軍。その一部は信頼のおけぬものであった。政府に忠実な左派の部隊のうちで、後方を守っていたのは葉挺の第24師団と中央軍事政治学校であった。

その間、蒋介石は四川軍閥の楊森と唐生智の配下にある、独立第14師団長夏斗寅を武漢政府に敵対させた。楊森は抵抗を受けることなく長江の左岸を進んだ。第8軍と第15軍は中立の立場をとるか、裏切って敵側につくか議論していた。その際、15軍の中の湖北軍は裏切るだろうということが全く明らかになった。楊森に対抗する部隊は沙市地区で戦線を空け、汽船やサンパンに乗って撤退した。夏斗寅は長沙に向かう最も重要な鉄道幹線を遮断し、武漢から15kmの地点まで接近した。

首都の陥落は時間の問題のように思われた。まさにその時、共産主義的傾向のある葉挺の部隊が1927年5月16日—20日の戦いで、革命の首都を命をかけて守った。反乱は阻止された。蒋介石は、夏斗寅の反乱は自分の指示にしたがって行なわれた、と公然と述べていたが、見込み違いに終わった。しかし、5月20日、長沙でクーデターが起こった。

ソ連の顧問達は指摘した：《湖南省のクーデターの糸が唐生智軍の上層部に繋がっており、そこから夏斗寅に繋がっていることは全く明らかである》。1926年12月にはすでに、唐生智の参謀本部員全員が湖南省の農民達は共産主義を実行している、と考えていた。湖南省出身の将校達は農民運動の進展について、何度か会議を持った。

長沙近郊の村の農民達は35軍の軍長の父親を、アヘン吸飲のために逮捕し、屈辱的な三角帽をかぶせて引き回した。何健の兵隊達は農民組合を解散させ、労働者ピケ隊の武装を解除した。武器の返還に関する交渉が始まったが、中断された。5月22日、杭州から許克祥大佐が到着した。彼は国民党小委員会の代りに、党の粛清に関して緊急委員会を組織し、武漢政府を動かした。

醴陵、岳陽、その他の場所で、大衆組織のメンバーが次々と殺害され始めた。反乱者グループは活発に活

動していたが、その数は600~1,000人にすぎなかった。

ボロジンは《最初、彼らは武装解除されるのではないかと恐れていた》と言及した。だが、ここでも湖南省の左派勢力は機会を失った。岳州の師団は四川省からの脅威を無視して、汽車に乗り込み、反乱者達を助けに移動した。クーデターの指導者何健は唐生智を無視して、広西側や南京側と話し合いを始めた。

残念ながら、湖南省の左派勢力は柔軟性に欠けていた。その省の農民運動はその要求や行動の点で、局地的であった。各地の農民組合は春に行なわれる投機の波を阻止するために、米の搬出を禁止し、省政府も規制を設けた。武漢、とりわけ前線は食料の無い状態に陥った。このことによって、《軍と前線を飢えから救え》《米の移動を許可せよ》《北伐の英雄達を護れ》等々のスローガンのもとに、反乱者達が反革命を行なう可能性が生じた。反乱者達は新聞紙上に、米の入荷の情報を載せた。

ボロジンの意見では、湖南の左派勢力は《軍の構成を十分に考慮していなかった》、また彼らは反撃のための力をタイミングよく準備していなかった。1927年5月19日、省政府は面積が5畝以上の土地を全て接収する法律を採択した。その際、国民革命軍の将校達の権利を留保しなかった。5月20日に過ちが正されたが、遅すぎた。湖南の革命組織の下手な行動が悲しむべき結末に導いた。反革命テロの犠牲者は数えきれないほどだった。

1927年6月5日以後、弾圧が広西省にも広がった。ここで、朱培徳は古典的な中国軍閥のやり方でクーデターを実行した。彼は自軍の中からコミュニスト130名を集め、将校達が彼らの行為に不満を持っているために、将校達の気が済まるまで彼らを武漢に送ると言い、旅行費用を渡した。同時に、彼らの生命と財産を守るという、当にならない指令が出された。要するに、これらは全て蒋介石のやる芝居と、とんぼ返りに似ていた。時には、蒋介石は思いも及ばぬ策略を巡らした。汪精衛が蒋介石の管轄地を通して武漢へ向かう際、蒋介石は彼を愛想よく迎えただけでなく、彼がそこへ止まって政府の首班となり、蒋介石自身はその下につくという提案をした。勿論、これは全くのでたらめであった。武漢政府に対する蒋介石の闘いはすでに述べたように、武漢側の極端な一貫性の無さと極めて重大な誤算によって、一層容易になった。

武漢左派は蒋介石に対して即座に打撃を加えず、馮玉祥の国民軍と連合するという第一の目的をもって、北方、即ち河南省への進撃を続ける決定をした。河南省では流血の戦いが始まった。1926年10月にはすでに、国民革命軍の第8軍及びその他の部隊が湖北省の北境にある峠、武勝関を占拠した。国民革命軍の北方

進撃の考えを支えていたのは、河南省の軍閥軍が全く分散しているという判断であった。蒋介石と彼の支持者達が東方へ去ったので、武漢地区の最高軍事指導者になったのは唐生智であった。1927年1月までに彼が支配したのは自軍の第8軍以外に、張奎奎の第4軍、陳銘枢の第11軍(その中には賀龍の5千名の兵員を有する独立師団が含まれており、それはやがて南昌の共産党蜂起の主力の一つとなった。顧問はКуманин)、何健の第35と36軍—合計5万人以上であった。最高指揮官の支配下にあったのはこのようであった。国民革命軍は作戦開始当時、全体で約10万人の軍隊を河南戦線へ送り出すことができた。(国民革命軍に移ってくる可能性のある河南省軍、当てにならない陳調元の安徽省グループを除く)直隸—奉天軍閥はこれに対して12万—18万の軍隊を対峙することができた。つまり、彼らは数において断然優位にあった。馮玉祥が本気で積極的な軍事行動をおこすことを期待するのは困難であった。1927年1月、彼は陝西省南部へ遠征をし、当地の地方軍閥を撃破し、四川省へ追い払った。彼はまた潼関の関を越えて進み、敗北した呉佩孚の残存部隊と共に河南省に居ついていた呉佩孚にパニックを引き起こした。呉佩孚は国民軍が洛陽へやって来て、Fang Zhongxiuの地方河南軍や国民革命軍と連係するのを恐れた。それにも拘わらず、馮玉祥は信頼するに足りなかった。というのは、彼の要領の良さと、自分の軍隊を温存して他人に戦わせるという、はっきりと表われた意図が知られていた。

1927年初め、奉天派張作霖の主力は京漢線の北部を占拠し、呉佩孚がその中央部を支配していた。張作霖は馮玉祥の国民軍に対する防衛を準備し、呉佩孚が自分の陣営に移ってくるよう努力した。呉佩孚の河南軍はパッチワークの毛布のようであった。それは少なくとも6グループに分かれ、彼自身が直接支配していたのは1万人にすぎなかった。国民第2軍から移ってきて山東軍閥と繋がりを持つ田維勤もいた。かつては国民第2,3軍の一部で、密かに馮玉祥と取引をしていた河南西部の土匪等々もいた。河南軍の総司令官寇英傑は鄭州に司令部を設けていたが、一方、呉佩孚自身は《紅い槍》(地主の影響下にある農民の秘密結社)の助力を当にして、馮玉祥から洛陽を守るための指揮をとった。呉佩孚の《お気に入りの》考えは武漢を奪還することであった。そのために、孫伝芳や山東軍閥と協力し、安徽省から南方へ出撃することを考えていた。だが、河南の将軍達は呉佩孚の個人的な利害のために戦う気は全くなかった。彼らは斯雲鶚を頂き、本来の首領吳と袂を分かった。そこで呉佩孚は大急ぎで懲罰のための派遣軍を組織せざるを得なかった。その頃、ブリュヘルは個々の将軍達の気質に関するデータを注意深く分析し、河南軍のどの部隊が国民革命軍に寝返る

可能性があるか、どの部隊が奉天軍に寝返る可能性があるかを絶えず推定していた；彼の見積りでは大体半々であった。結局 1927 年 2 月終り、奉天軍閥軍は河南へ前進して横河を渡った。山西省の巨大な軍閥閻錫山もまさにこの時、自己の立場を決定した。彼は国民革命軍側に移り、奉天軍閥軍と戦うために 4 万人の兵をそれに割り当てた。1927 年 3 月 1 日、奉天軍は開封を占拠した。そこで河南軍のほとんど全てが国民革命軍側に加わっていることがはっきりした。奉天軍閥と山東軍閥は連合していたが、直隸省と京漢線のために鋭く対立していた。彼らはそれらをお互いに分け合うことができなかった。山東軍閥の主流は徐州地区に駐屯しており、河南戦線には予備軍を別にして約 4 万—5 万の兵が投入された。後方には、悪名高い Нечаяев の白色師団があり、今や軍団に成長していた。奉天軍と山東軍は合わせて 20 万に達していた。これは典型的な旧中国の軍閥であった。顧問達は次のように書いた：《住民を略奪することは山東軍閥軍の際立った特徴である。もっとも奉天軍もこの点については大差がなかった》。軍閥間だけでなく、各軍閥の内部にさえも堅い結びつきがなかった。奉天軍の中で最も積極的な南方軍に対する主戦論者は奉天総督の息子、若き元帥張学良であった。彼は自由になって、全ての軍事、外交の仕事を手におさめるために色々手を尽くした。一方、南方軍に対する軍事行動に反対だったのは楊宇霆であった。彼は若き張学良等の意志を無視して奉天兵器廠長になった。奉天軍と山東軍は呉佩孚のいくつかの部隊を武装解除し、河南軍の将軍達の多くを憤慨させた。これら野獣達の一味を一時的に、全て団結させることに大きな役割を果たしたのは帝国主義国家の仲介であった。かくて、主要な反革命勢力である《中国安国軍》が創設された。それは国民革命軍との闘いにおいて、いくつかの大きな利点を持っていた。その後方には、すばらしい連絡線—大きな鉄道が走っていた；それは技術的にもかなり優位となった。河南に奉天軍の 5 個師団が進駐しており、その一つ第 8 軍は騎兵兵団であった。主力は 10 個砲兵連隊（3 万人）で、360 の大砲のうち野砲が半分を占め、その他に山砲と数門の重砲があった—その 40% は日本製、20% はクルップ製であった。各大砲には予備弾薬が 400 発もあった。以前に述べた作戦から読者がわかるように、これは国民革命軍にとっては夢のような話であった。裏切りによって自分の名をけがした将軍が砲兵隊を指揮していた：私が以前に書いた郭松齡事件の際、彼は郭松齡の砲兵隊長であったが、自分の司令官に砲火を開き、その代償として現在の地位を手に入れた。奉天軍の将軍の半分までが日本の軍関係の学校で教育を受けていた。ブリュヘルは状況を次のように要約した：河南で国民革命軍は《初めて立派な軍隊と衝突した》。《紅槍

の活動も事態を一層困難にしていた。彼らは後方と前線部隊との連絡を遮断した。上に述べた事は全て、河南における軍事作戦の規模の大きさや、国民革命軍が遭遇せざるを得ない困難さを十分物語っていると私は思う。残念ながら、私は河南平原で闘う機会がなかった。従って、私は当地の闘いについて自分の言葉で詳細に記述することができない。国民革命軍は革命の情熱で敵の力に対抗した。第一線で闘ったのはコミニスト達で、闘いは途方もない流血の惨事であった。数日で、7-8 千の国民革命軍の戦士が倒れ、その中に第 4、11 軍の最も優秀なコミニストの若者達が含まれていた。奉天軍は初期の英国製の戦車まで持っていたが、国民革命軍の戦士は銃一丁につき 50 発の弾薬で戦わねばならなかった。それにも拘わらず、ヒロイズムと不屈の精神が持てる力を発揮した。中国にまだ残っていたソ連の顧問達がこの作戦で重要な役割を果たした。洛河のほとり Xuzheng 近くで最も激烈な戦闘が起こり、《安国軍》が敗北した。鄭州で国民革命軍は馮玉祥と合体した。その後、第 4、11、20 軍（賀竜師団を基礎として編成）は反乱から後方を守るために、武漢に至急引き揚げざるを得なかった。間もなく、武漢の革命センターは無くなり、革命は血まみれになったが、河南省における革命戦士の英雄的行為は無駄にはならなかった—主要な武装反動勢力に仮借なき敗北を加えることができた。これはその後の闘いに大きな影響を与えた。

《国民党左派》は蒋介石にならう

極めて高い代償を払って得た前線での勝利ももはや、武漢の革命基地を内部崩壊から救うことができなかった。武漢政府は活動の初期の段階では、反動の猛攻の前に動揺し、退却したと同時に革命に有用なことを数多くなしたとしても、その最終段階では、恥ずかしげもなく反革命に対し自ら次々と譲歩し、大衆を裏切ったり欺いたりした。湖南省のクーデターに対し国民党中央執行委員会のとった立場は成行きを待つという、消極的な立場といえる。武漢政府は唐生智麾下の教導師団の師団長周燦を長沙に派遣した。彼は労働者を非合法的に処刑するのを止めさせた。だが、その時には処刑は《合法的に》実行され始めていた。国民党湖南省委員会の議長と書記長は非合法化された。隠れた反動派である周燦は国民党中央執行委員会政治局に、労働者—農民運動の再編成と《悪党の追放》を提案した。続いて 1927 年 5 月 24 日、武漢政府により、国民革命軍の将校達の家族を保護すること、没収された全ての資産や土地を厳しい処罰の脅しのもとに彼らに返還すること、という指令が出された。《善良な地主》の土地の没収を禁止する指令も出された。そのような

人々の資産や信条に脅威を与えてはならないと指示された。農業問題の解決に向けて武漢政府《左派》が示した最も《大きい》前進は、反革命分子の土地を一部没収するという国民党中央執行委員会政治局の決議であった。しかし、それは秘密であると宣言された。

汪精衛が湖北省の国民党代表者会議で行なった演説は、国民党《左派》の一般的な社会綱領を理解する上で興味深いものだった。三民主義に一致していると彼の言う国家資本主義を一時的に実行する必要があること、国民革命軍の将校達の財産及び家族を保護する必要があることについて彼は述べた。先ず資本と労働者支配の問題を解決し、帝国主義を清算しなければ土地問題の解決は不可能だと彼は言明した。社会改革を引き伸ばそうとする意図は武漢の国民党会議における孫科の演説にも貫かれている。孫科は、党の中のいくつかのグループの犯した《最近の過ち》、《民衆運動の余りにも急速な進展》、大商人から革命軍が受け取る資金は軍の勝利のために必要なものであること等々について述べた。武漢政府の人々は大衆をひどく恐れる一方、蔣介石と彼の独裁者志向をも恐れ続けていた。だが、彼らは大衆の高揚した精神の助けを借りるのではなく、一部の将軍達の支持のもとに蔣介石に打ち勝とうとした。河南作戦での《左派》の隠れた意図は馮玉祥を奉天軍と戦わせ、自らは蔣介石に報復しようとした。1927年8月1日の南昌蜂起まで、《左派》は中国共産党に対する抑圧の代償に、将軍達の援助を確保することを期待して、南京への進撃という考えを捨てなかった。

6月初め鄭州で、武漢国民党のリーダー達と馮玉祥との会談が行なわれることになっていた。その前に5月30日と6月2日、ボロジンの家で2つの会議が持たれた。汪精衛は南京の反革命の解消に賛成の発言をし、湖北省西部の解放のために小部隊を残して軍をそれに向けることを要請した。彼を支持したのは程潜であった。彼は当時の兵員を考慮に入れ、次のような順序で戦力を分配した：1) 武漢 2) 奉天 3) 南京。国民党中央執行委員会政治局は蔣介石に対する進軍に関して正式な決議を採択した。だが、会議での武漢政府の指導者達の態度は革命の事業に対する完全な不信をすでに反映していた：孫科は話しに加わらず黙っていた、譚延闓はあからさまに眠っていた、徐謙は、彼の顔を知らない護衛兵が彼を中に入れなかったのもので、その会議に出席することができなかった。国民党の省レベルの機関には武漢政府よりもはるかに多くの左翼がいた。それ故、中央執行委員会は鄭州会議の前に彼らの活動を制限するための方策をとった。6月1日《People's Tribune》に指令が出された。国民党組織を批判してはならない、地方行政の事項に関する提案を省の組織に持ちこむことは許されていても、その地区の行政事項に干渉してはならない。同時に、国民党地区組

織は上級組織の許可なしに逮捕したり、罰金を課することが禁止された。政府は違反者に対して厳しい処置を加えると威し、この指令の違反に責めを負う地区組織は解散されるべきだとした。6月1日、より背信的な文書が出された：湖南省の国民党地区組織や女性団体や農民組合の解体に関する指令、クーデターの原因究明をも禁止。6月2日、《People's Tribune》に労働者、農民、商人組織の合同アピールが掲載された。次のように述べられていた：《残念ながら、我が革命戦士達が前線に敵に攻撃を加え、反乱軍の前進を阻止した瞬間に、後方の湖南省の労働者、農民、兵士達の間にいさかいが起こった……》。地区社会組織の代表者会議を持つことが決められ、唐生智との連帯が明らかにされ、政府に問題調整の要望が表明された。実際には、これらの文書は全て降伏のように響いた。それらは軍閥に対する奴隷根性、軍閥の支持を得るために進んで大衆を静かにさせるという精神に満ちていた。鄭州の会議は1927年6月4日—7日に行なわれた。最初に到着したのは政府のメンバーであった。馮玉祥が到着する前にすでに最高司令官唐生智との会談で、軍を後方に移動させる問題が決定された。最も優秀な革命部隊は河南戦線で致命的な損害を受けた。一方、湖北省に今戻そうとしている部隊は恐らく、大衆弾圧のために利用されるであろう。軍が去ってしまうと、代表団は自分達の立場を支持してくれる軍事的基盤を失った。会議自体は形式的な様相を呈した。馮玉祥は蔣介石に対して義理を感じていたので、調停者として全く曖昧な役割を果たした。汪精衛は全般的な政治情勢について報告し、孫科は財政について報告した。両者とも南京側に激しく反対の発言をした。徐謙と顧孟餘はその逆に、南京との統一に賛成し、会議が終った後、武漢に戻らず公然と反動派の一味になった。それでも当時は、国民党内部にはまだ誠実な革命家がいた。長沙のクーデター後、逃げた湖南の人々の中から武漢にいわゆる湖南委員会がつくられた。1927年6月12日《People's Tribune》は総勢80名の国民党湖南組織代表団の団長とのインタビューを掲載した。この代表団は国民党の総書記に対する請願書を作成した。その中には次のような条項が含まれていた：1) 許克祥を裁判にかけける命令をただちに出すこと、2) 湖南省に国民党組織を再建すること、3) 唐生智を呼び戻し、政府の機能を回復すること、4) 蔣介石と許克祥に死刑を宣告すること、5) 湖南省の《国民党救済委員会》を解散すること、6) 労働組合と農民組合を回復すること、7) 犠牲者の家族を援助すること。文書の内容は明らかに堅固な革命精神と敢闘の精神を物語っている。

《左派》はどのように答えたか。彼らはまたしても引きのばし作戦をとった。国民党総書記は湖南省の人々の要求を説明する電報を鄭州に送ること、弾圧を禁止

する別の電報を許克祥に送ることを約束した。さらに、許克祥を罰する問題を中央執行委員会の会議に提出すると約束した。しかしその時までにはすでに、湖南省では白色テロが荒れ狂っていた。鄭州会議後、《左派》は最終的に、悪意に満ちた革命への裏切りの道、中国共産党に対するテロ、孫文の遺訓に背く道を選んだ。この裏切りを理論づける人々も直ちに現われた。このような政策に関する論説を出したのは顧孟餘であった。それは《孫文主義》と虚無主義と名付けられた（勿論、後者は Kommunismus を暗示）。孫科と唐生智はボロジンに《国民党内部の Kommunists の一味》と罵倒した。1927 年 7 月初めから、Kommunist の問題について国民党中央執行委員会が何度か開かれた。汪精衛は国民党から彼らを追放することを特に主張した。Kommunist 達は約束を守らなかった、また国民党をめちゃくちゃにしている、と彼は断言した。その時までには中国共産党は政府から 2 人のメンバーを引きあげた。このことによって汪精衛は次のように発言することができた：《彼らが政府の仕事という重荷を果す気がなく、政府から出て行きたいなら、彼らは国民党からも出て行かねばならない。自分で国民党から出て行かないならば、追放されるべきである》。要するに、汪精衛は中国共産党との訣別を主張する指導的な人物として発言した。そして 10 年後、民族の利益の軽蔑すべき裏切者、日本帝国主義者の手先の役にまで転落した。陰謀は綿密に準備された。漢口は戒厳令下にあると宣言され、いくつかの作戦地区に分けられた。そして、各地区の司令官に Kommunists を指定された時に逮捕する任務が与えられた。漢陽の兵器工場で、労働者のリーダー 7 人が射殺され、その後、武漢に反革命テロの濁った波が飛沫をあげてなだれ込んできた。

左派国民党員の中の誠実な革命家はこれらの事件を沈痛な思いで知った。彼らは中国共産党との訣別が孫文の理想の裏切りを意味すると考えた。こうした人々の見解は 7 月 18 日に出版された宋慶齡の有名な宣言の中に見られた。この文書はいくつかのパンフレットの形で出され、漢口と九江で大勢に配られ、上海の新聞のいくつかに掲載された。それは《People's Tribune》にも掲載されたが、顧孟餘はこの号を押収する命令を出した。武漢の革命センターは斯くしてその存在を終え、革命のこれまでの全過程は終りを告げた。

革命の可能性は全て消滅したのだろうか

《左派》は常に動揺し裏切り行為に終わったけれども、武漢の段階は中国の共産主義運動の発展に対して多大な貢献をした。北伐の時期、またその後の武漢政府支配下の地域で、Kommunist は自己の党が急速に発展するすばらしい機会を得た。問題はこれらの機会を最

大限に利用したか否かにあった。日に日に大衆運動は発展して行った。当時ボロジンは語った：《中国の Kommunists は大衆運動に立脚し、《中山艦事件》で彼らが奪われた地位を取り戻すだけでなく、その後自己の影響力を大きく伸ばしていくだろう。なぜなら、新たに加わった省ではどこでも彼らが大衆組織、組合、党（国民党一著者）組織の先頭に立ってきているからである》。反革命との武装闘争、大衆の団結と彼らの政治教育のための献身的、犠牲的活動、そして統一革命戦線の強化において、何千もの Kommunists は真のヒロイズムを発揮し、中国における偉大な民衆の解放闘争の歴史に不滅の数ページを刻んだ。革命の高揚は中国共産党が数百人の小さな組織から有力な、当時の条件の下ではある程度大衆的といえる政党になり、また質的には大衆の間に自己の影響力を広めていく可能性を与えた。勿論、私は 1925-1927 年の革命期間における中国共産党の闘争の過程に関して、深い考えを持っていると主張することはできない。だが、中国 Kommunists の英雄的な闘争を直接目撃した者として、私は自分の考えをいくつか述べてみたい。私をそういう気持ちにさせるのは、軍事顧問の私よりもっと中国共産党の活動と密接な関係にあった同志達との対話の思い出と、他の顧問達と同様に私の特徴でもある、出来事の本質を解明しようとする熱烈な意図である。

コミンテルンが提唱した統一戦線の路線は中国で国家規模の共産主義運動を起こすための全ての条件をつくったが、一方、中国共産党がその前に開かれた可能性を全て利用したとはとうてい言えないと私には思われる。これには多くの原因があったが、主要なものは恐らく党が極めて若く未熟であったこと、また人民の意識も不十分であったからであろう。コミンテルンとソ連共産党の経験の研究は中国共産党の思想的発展に多大な貢献をしたが、勿論、党の成功はその 90% が各地にいる Kommunists 自身の日常活動、政治状況の下で進むべき道を決定し、全ての複雑な問題に素早く反応する指導能力、中国共産党の戦術的手腕、前進したり前もって準備された陣地へ組織的に後退する能力に依っていた。ここでも若い中国共産党は多くの過ちを犯した。我々同志達はこの過ちに気付いたのだろうか。勿論気付いた。だが一体、何ができたのだろうか。党は民族革命の大きな渦の中で日々成長し強固になるよう求められていた。それはレーニンの言葉の、一日の経験が平和的に発展する時の一年に値する時であった。コミンテルンやソ連共産党の多大な配慮と透徹した判断が然るべき役割を果たした。だが勿論、中国共産党の理論及び思想的活動に取って変わることはできなかったし、またそうすべきではなかった。現地にいる方が常に状況がよくわかる。中国にいるソ連の顧問達は中国共産党員と誠実且つ率直に、共産党員らしく自分達の

考えや不安を分かち合った。

ボロジンは中国共産党の活動を注意深く分析した。彼は当然のことながら、多くの点に危惧をいだいていたが、陳独秀教授の指導する中国共産党中央委員会の活動に対してもそうであった。中央委員会は長い間上海のフランス租界にあったが、1927年3月～4月にやっと武漢に移った。勿論、上海は最大のプロレタリアートのセンターであったが、広州、後に武漢でも革命及び党の運命にとって最も重要な活動が統一戦線という形で行なわれていた。中央委員会はその活動から著しく引き離されており、嵐の如き進展にうまくついて行くことができなかった。ボロジン（彼は中国共産党中央委員会を広州へ移すよう度々勧めた）は招待された中央委政治局会議で率直に次のように述べた。中央委員会政治局は私に、本が出るのを待ってその良し悪しを判定しようとする批評家を時折連想させる。中央委員会は《国民党員の誰かの発言に関する陳独秀の長々しい論文》とボロジンが名付けた発言を傾聴せざるを得なかった。ボロジンは中央委員会の活動の最大の弱点—現実の組織的活動から離れていたこと、物事に遅れをとる傾向、大衆ではなく特定の人に影響を与えようとしたことに気付いた。第5次党大会前の一時期、即ち革命にとって決定的な時にボロジンは指摘した：《論争のみで指導性が全くない——国民党員との会合の際、中央委員であるコミュニスト達は共産党中央委員会で前以って合意を得ることをせず、そこでお互いに論争し合い無責任な声明を出した》。この事は党が極めて未成熟で政治的に経験がなかったことを証明している。この時期の党指導部の公開された声明文からは、大衆による組織的な信頼できる支持を当てにしていることが全く感じられない。さもなければ、声明文がどうしても不必要な卑下精神に満ちているかを説明することはむずかしい（例えば、汪精衛が上海の街を通り過ぎる際に陳独秀と共に出した声明文）。そのような声明文は党や大衆を迷わすだけであった。

1927年5月20日すでに、国民党中央執行委員会はコミュニストの活動を制限する一連の指令を出した：軍からコミュニストの政治委員が、労働組合及び農民組合からオルグが排除された。これは江西省の主要な都市及び他の地域で実行された。これに対して中国共産党中央委員はどのように反応したか。丁度その時、陳

独秀の論説と、国民党湖北組織の機関紙《民友日報》の編集長でコミュニストである人物の文章が出された。両者の本質は同じもの—企業家達を支持する必要性であった。その当時、統一戦線維持の問題を提起することが正しかったとしても、中国共産党が打撃を受け、その影響力の範囲が縮小していく背景の下で、一体、このような声明が何の役に立ったであろうか。1927年5月25日、国民党の中央機関紙に《革命、習俗、儀式》という文章が発表された。その中で、コミュニストである筆者は革命思想をいづく女性達の間に広まっていたファッショナブルな髪型の流行病に反対し、また纏足の禁止を求める《あまりにも急進的》な運動に反対し、迷信に対して極めて激しい攻撃を加えることに反対している。こうした問題に関して公然と発言することが適当であったろうか。また女性運動参加者の急進的行為を党内指導の枠内に留めておくことができなかったであろうか。中国共産党中央委員会は蒋介石と唐生智のどちらが結局は良いかを、多くの時間を使って研究した。結局、蒋介石はチャンスがあると再び《中山艦事件》の際の要求を持ち出す可能性があるので、彼の方がより危険であると認められた。《しかし、中国共産党は蒋介石に対して正しい評価をしたが、実際には決議だけで、将来の反革命と敢然と闘う準備を真剣にやらなかった》（ボロジン）。中国共産党湖南省組織は唐生智をあまりにも信用しすぎていた。顧問達は唐生智が危険な人物で、これ以上革命と共に歩むことはないだろうと湖南省組織に注意を促す義務があると思った。個人に対する階級的評価や複雑な状況に対する全般的な分析のこうした弱点は全て、党の経験の不充分さだけでなく、その階級的基盤—工場プロレタリアートの未熟さに起因していた。労働者・農民運動の規模は大きかったが、内在的力量は十分ではなかったことを顧問達は指摘した。全中国労働組合評議会のある指導者が1927年5月、談話の中で次のように述べた：労働者組織は数の上では大きい極めて弱体であり、いくつかの組合はお互いに敵対し、労働組合中央評議会の指導に従わず、活動の経験が無く、大衆との結びつきがない。4月には湖北省の多くの組合組織に27万5千人もの様々な職業の労働者がいた：人力車夫、店員、仕立屋、コック、ホテル従業員、靴屋、理髪師等々。